

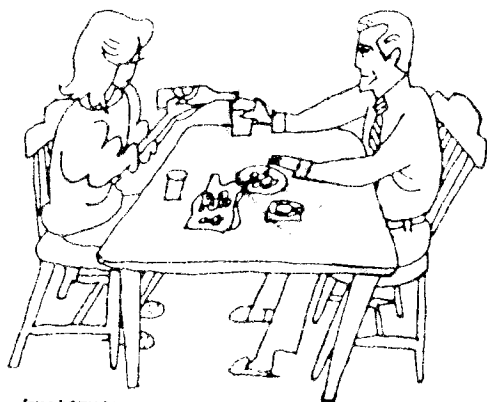
とまどいの日々

青島幸男



とまどいの日々

青島幸男



毎日新聞社

とまどいの日々^{ひび} 定価九八〇円

昭和六十年四月十五日 印刷
昭和六十年四月三十日 発行

著 者 青島幸男

編集人 川合多喜夫

発行人 関根 望

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島

〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版 製本 佐久間製本

とまどいの日々

装
幀・装
画

長
尾
み
の
る



逆境の与えてくれるものはすばらしい。ガマにも似て、醜く、毒も含んではいるが、その頭の中には宝石を持っている。Ⅱウイリアム・シェークスピア

天井にパドルファンとかいう、あの旧式な扇風器が廻ってまして、壁もピアノも真白に塗ってあり、これまた真白のテーブルをピカピカに光ったステンレスパイプの椅子がかこんでいるんです。やたらに低音の響くスピーカーの音が腹をゆすりたててくる、近ごろはやりのカフェバーってやつなんですなこれが……。

あたりを見廻すと若い奴等ばかりで、ここにいろとなんか一人だけ場違いな所へ突き出されたように落着かないったりやありやしません。

え、私ですか、いい年ですよ。片手ですよ。そう、ちょうど五十歳。いやな響きですな……隣のテーブルに居る若い連中が、汚いものでも見るような眠つきでちらちらこっちへ視線をむけるんですが、その度に何かごちゃごちゃ云ってケッケ、ケッケと笑うんですよ。そう、気のせいで

すよ。連中、私の事なんか気にしてるわけはないんです。

こっちもその日はイキがって、ページュの背広に白紺の水玉のネクタイできめていましたから、何もビビることはないんです。久しぶりにジャックダニエルスなんてペーボンをソーダー割りでやりながら、カサブランカのハンフリー・ボガートを気取って、ラークの煙を吸ったり吐いたりしていました。

そういえばあのボガートのやった役は、いくつぐらいの設定だったんでしょねえ。当時は随分オジンに見えましたけど、今考えてみりゃどうしたってこっちの方がずっとオジンです。本当のこと云うと私、去年の夏から煙草止めてたんですけどね、どうもこういう状況に置かれると間がもてなくなってしまう……。

女房の奴がね、煙草をやめろってうるさくいうんですよ。

「アメリカじゃ今時偉そうにタバコ喫ってるのはサーカスのチンパンジーだけですってよ」とこうです。こっちも頭にきたから、

「いいんだよ、肺ガンで死んだって俺は本望だ」

って怒鳴りましたよ。

そうしたら、

「貴男なんかどうなってもいいけど、一緒に住んでる私が嫌なのよ」

って怒鳴り返して、煙草もライターも灰皿も、みんなぶん投げちゃいましたね。あたし、それつきり煙草止めさせられたようなもんで、だらしがないんですよ、全く。

それというのもね、近頃女房の方が稼ぎがよくて、経済的な主導権を握られてまして、全く頭が上がりません。人間不思議なもので、俺が稼いでる、俺がお前等喰わしてんだと思うと、多少の自信も持てるし、何か云う事に迫力もともなうんですがね。

「貴男の稼ぎなんか当てにしません」

という態度をあからさまにしてこられると、もうまるでだめです。こっちもね、まあ女房に少し位威張らしたって、実質的に使える金が増えればそれでいいといじけた気持を抱くようになって、それがなおのこといけないんですな。

女房の奴、最初はスーパーマーケットにパートで出てたんですが、そのうち、近頃はやりのビタミン剤だの滋養強壯剤だのってのの販売をはじめ、これがうまくいって、今じゃ磁気マットだの羽毛布団まで扱って、大変な羽振りなんです。

おかげで給料は半分しか家へ入れなくて済みますから、こっちの懐はかなり裕福です。

しかし本当の事云って、こういうのは精神衛生上あまりよくないようです。半分ヒモになったようなもんで、人間が卑屈になつていけません。夫婦のことにしても、何かそれがひっかかってきつかけがつかめなくてだめですね。

うっかり手を出すと変に媚びてるようにとられやしないかとか、稼ぎもないくせに何すんのようつ、なんて云われやしないかとか。え、もともと家は盆暮の御挨拶程度で、ごくたまになんです。今年が銀婚式ですからどちら様でもだいたいそんなものでしょう。

有難いことに家の家内はわりと淡泊っていうんですか、冷凍食品みたいなものでして、ほんと

いても泡をふいたり色が変ったりしないんです。まあなにより今は畏れ多いというのが実感です。同じようにいっそこっちも無慾でいられば問題はないんですが、情けない位とすべきか、浅ましくもと表現すべきか、その潜在的ポテンツは、実に自分でもびっくりするほどでして、今までよく痴漢にならずに持ちこたえてきたもんだと己の自制心に拍手を送りたいと思ってる位なもんなんです。

ことにミニスカートのヤングギャルってのがだめですね。そこに居られるだけで腹が立ってきて……。ええ見てるんですよ、夜のテレビ。阿呆みたいな女子大生が舌っ足らずなしゃべり方で、くだらないことをゴチャゴチャ云ってるの。翌朝ねむいの判ってるのに三時過ぎまで付き合っちゃったりして。

それでああいふ番組って、見てて何かこううしろめたい気がしてね。で、誰かに知られるのいやだからイヤホンなんか使ってるんですよ。しまいには耳がすごく痛くなってきた、それでもまだ見てんだもん、本当にもう馬鹿ですねえ。

それがね、その日は可愛いギャルが一緒だったんですよ。いい娘ですよ。年は二十一です。胸の広くあいた生成りの木綿のワンピースがよく似合っていて、身長は一メートル六十位はありそうです。ちょっと太めなところがまた嬉しいんですよ。五十キロはあるでしょう。

でもウェストはきゅっとしまっていて、やっぱり若さですかね。髪は今はやりのサーファーカットってやつですか。眼はぱっちりしてて少し受け口で、これが又色っぽいったってもう、よだれが出そうってやつです。

真正正銘の女子大生。一流大学の二年生で、一人で東京でアパート住まいです。四人姉妹の末っ子で、実家の酒問屋は一番上の姉さん夫婦が継いでるといってました。親父さんは十五年前に他界してるんですな。これが有難いといつては何ですが、ちょっとやっばり居ると思うと気が重いでしょ。ましてこっちより若いお父さんなんてのに、何かの時に出てこられたら目も当てられないですよ。

フロアへ出て行ったきりなんです。よっぽどダンスが好きなんですな。見てると結構うまいんです。若い娘が夢中で腰振ってるつてのは相当セクシーですね。しかもそれが、これから何とかなるかも知れないってんですからこりゃたまりませんよ。

ただね、誰か彼女にちょっかいかけやしないかとそれが気がかりでね。落着かなくなつて酒の味なんか判りゃしない。何かヒビジイになったようでいやですねぇこういう気分。

ディスコダンスつてのは、何が面白いんでしょうね。ただリズムに合わせて動いてりゃいいんだからつて、無理矢理フロアへ連れていかれて一曲付き合つたんですが、面白くも何ともない。だいたいあたしらみたいな昭和ひと桁の終りつての、損な時期に生まれついてまして、何をやってもだめなのが多いですよ。社交ダンスのステップの一つ位踏めなくてどうするつてんで、当時学生達の間でパーティなんてのが流行つてましてね、友達の家の廊下へ足形を張つて、電蓄の音に合わせて……電蓄つてのも古いなあ、スロー、スロー、クイック、クイックなんてやったもんですが、今考えるとぞつとしますな。ニキビ顔の学生服が抱き合つてお互いの足を踏んづけっこして、そのうちジルバが主流になって、ヘドモドしてるうちに、マンボが全盛で、今度こそ何と

かしようと思つたらロックブームでツイストじゃなきゃだめ。とうとう何も身に付かないうちに通り過ぎちゃった。

この年になると腰が痛くてデイスコダンスなんての夢中になれやしませんよ。

想い起せば私達の世代はつくづく損ばっかり。学校へ行く年、昭和十六年四月に尋常小学校が「国民学校」にかわり、戦争が終つて国民学校を卒業すると「六三制」の実施で新制中学の一年生に入れられました。高校はそれまで女学校だったのがその年はじめて男女共学に踏み切るつて所へ押し込まれ、手のひらかえたような民主主義教育で先生も生徒も戸惑っているばかり。やっと大学を出て商社に就職しましたが、考えて見れば我が国の高度成長期の「尖兵」として徹底的にしごかれ、今度は、低成長、高齢化社会の真只中で、「みじめな中高年族」の第一期生という事になっていました。

その上戦争中に成長盛りだったひと桁世代は、喰いもんが悪かったから突然死する者が多いなんて云われりや世話ない。これじゃまるで踏んだり蹴ったりで、あたし等がいったい何悪いことしたって云うんです。

フロアから戻つて来た彼女つてのが又いいんですな。上気して赤くなった頬に髪の毛が汗でくっついてたりして、隣にガタンと坐られると、熱気と共に甘ずっぱい香りがただよってきて、うっもう死にそう。

「ねえ、おじさまでどうして踊らないのォー」

といいながら私の腕をつかんでゆするんですよ。この「おじさまあー」って呼び方ね私はじめ

好きじゃなかったんですよ。

よく寿司屋なんか居るでしょう。いい歳して娘みたいな女にそんな呼び方されて、下つてるのが。あんなのを見ると腹が立ってきて、つい、

「ねえそこのおじさまーっ一杯さし上げましょうか。あれーっ、どうして、どうして俺の酒が呑めないの」

ってなこといつてからみたくなっちゃうんですよ。まさか自分がそんな風に呼ばれるなんて思ってもみませんでしたからね。でもまあ、多少身勝手かも知れませんが、実際問題として呼ばれる方の身になってみると決して悪いもんじゃありません、こりゃ。

それに腕をゆすられる度に肘が彼女の胸の所に当たったりなんかしちゃって、これも実に困りもんですよ。全くの話。

この彼女と知り合いましたキッカケが又面白いというのか熱いというのか。彼女、私の会社の近くの喫茶店でアルバイトをして居りまして、……いえ別に彼女に近づこうとしてわざわざ出かけて行ったわけではないんです。たまたま私の行きつけの店へ彼女の方がバイトに来たんでして、或る日私が膝を組んで、低めのゆったりしたソファに深々と腰をおろしていた所へですね、彼女が狙ったように私の股間に熱いコーヒーをドバーッとひっくり返してしまいました。いやーっその熱かったの何のって。すぐに立ち上ろうとしたんですが、足は組んでるし、ソファは大きくて柔いんで掴みどころがないんです。

私はアッチ、アッチ、アッチ、と手足をばたつかせてもがいてるだけ。驚いた同僚が、咄嗟に

そばにあったコップの氷水をバシャーッとかけてくれたんですが、たまげましたなあ、実に。すぐにママが飛んできて、

「大丈夫ですかーっ」ってきくんですが、大丈夫かどうかすぐそこで出して見るってわけにもいきませんもんね。

「すぐにお医者さんへ」と大騒ぎ。

恰度そのビルの二階に外科があるんですが、ズボンのそのあたりをつまんでガニ股で歩く私を見てまわりの奴等、クスクス笑ってるんですね。私は怒ってるし、彼女は泣き出すし、三上戸揃っちゃって本当にもう……。

診察室へ入るとすぐにベッドへ寝かされて看護婦さんにズボンを取られちゃって、出て来たのが女医さんなんです。若くてきれいな先生。これがあなた、私のその……いろいろひねくりひんまわして、「良かったですなたいしたことはありませんよ」って油薬みたいのねたねた塗ってくれたんですが……判るでしょう。恥ずかしかったですね、いや本当に。その医者帰りぎわに、「多少包茎ぎみですから、今度、余った皮切ってあげます、もうエリマキトカゲみたいなのは流行ませんからね」なんて云いやがんの。大きなお世話だよ全く。

それから彼女、会社へ花束なんか持って見舞いにきたりして、ええ、ママに云われてきたに違いないんですが、話をしてみるととても明るくはきはきした娘で、聞いてみると出身が北海道で、私と同じ旭川なんです。それから食事にさそったりしてだんだん親しくなっただけでして。へ……実際にどうも申しわけない。

この日昼前に彼女から会社へ電話がかかってきましたね。

「おじさま、里沙ねーえ」

そうそうその娘の名前が里沙ってんですがね。内海里沙なんてタレントみたいな名前だねって云ったら、

「だって本名だもん」

って学生証出して見せてくれましたからこれは間違いありません。そうそれで、

「今日はどうしても連れてってもらいたい所があるんだあーっ、渋谷か新宿あたりで待ち合わせして」

なんて甘えられちゃって、すぐ、

「じゃ五時半にハチ公の前で……」

なんて云いかけて、はっと気がついて、「アルタの前」にしたりして。集団就職の中卒の坊やじゃないんだからこういうところは気をつかいませんとね。

「見たいお芝居があるんだけど一緒に行って下さる」

なんていわれちゃこりやもうどう仕様もない。いいともッと二つ返事で出かけて行きました。

行った所が下北沢。驚きましたなあ。学生の頃友達とあの辺で呑んだことありますけど、小便臭いような呑み屋が駅の近所にちらちらっとあるだけで、あとは大根畠か麦畠ばかりだった筈ですが、今やもっともナウい盛り場。中でもひととき目立つビルディングに目当ての劇場がありました。彼女は勝手に手を廻していたらしく、受付に行くとすぐに入場券が手に入りました。

私もこの所何十年で芝居なんてものは見ていませんから、ちょっと興奮しましたなあ。ベルの音がやむとすぐに場内は暗くなる。ちょっと手を伸ばせばすぐそこに温い彼女の手があると思うと歳がいもなく胸が高鳴りました。

いやうっかりここで手なんか出したら元も子もなくなります。あせらない、あせらないと自分をいましめ舞台に熱中することにしたしました。

ところがねえ、これがどうにもまいりました。下手に四疊半ほどの日本間があつて、その上がすぐ物干し場になっていて、上手の奥はお稲荷さんみたいなものがあつて、大明神の幟りなどが揚げてある。すごいエネルギッシュな若い役者が出てきて、いきなりべらべらと大きな声で、ヒステリックに怒鳴りたてる。

「不条理の世界の裏側に条理があり、邪悪と対比して正義を据えるというような子供じみた考えは捨てたまえ。世の中はそんなに构子定規なものじゃない。例えば太陽を見ろ。雲を見よ……」
ってなせりふを汗みずくになってまくしたて、いきなり物干しにかけ上り、空を指さして唄を唄う。すると下の四疊半に赤い長襦袢の女が出てきて踊り出す。といったようなもので、とても正気でやってると思えない。

このてのものは私には全く理解出来ない。詩どころってやつがないんですかねえ。恐る恐るあたりを見廻すと、皆真面目くさった顔をして見てるんです。困るんですよね、ああいうの。流行歌手が大劇場でやる芝居ってのもついていけないけど、あれは簡単に逃げ出せるからまだいい。あたしはいびきをかくらしいから眠るわけにもいかない。正に拷問をうけてるようなもんで、三

十分もしないうちに頭が痛くなってきちゃって、やっと暗転になった時、トイレへ行くふりして外へ出ましたが、本当にもう死ぬかと思いました。よくああいふものを野放しにしとくもんですな。

しばらく廊下のソファで休んでると、心配顔で彼女が出てきて、

「どうかしたんですか」

とのぞき込むようになりへ腰をおろしました。

「どうもしないけど、正直いってどうもああいふのは苦手でね。疲れちゃった。里沙はどんなの面白い」

っておずおずときいてみたんですね。するとどうです。黙ってニヤニヤしながら首を振ってるじゃありませんか。

「じゃ、このまま逃げだしちゃおうか」

というと、

「出ちゃおう、出ちゃおう」

彼女そういつてさきに立つと私の手を引っ張ってかけ出しました。いやー嬉しかったですなあ。それから下北沢の町を歩きましたよ。手をつないだままですね。手をつないで歩くなんて何でもないことみたいですが、これが違うんですね。ごく普通の何でもないことだぞーって顔をしてましたが、体つてのは正直に出来てまして、だんだん手が汗ばんでくるんです。それでも一回はなしちゃうと、いつ又うまいきっかけがくるかわかりませんからね。仲々はなさない。

世間の奴等は二人のことをどう思ってるかなあ、やっぱ親子とってるかなあ、なんて考えてる。親子と思われたって不思議はないんです。実際うちには二十一になる女子大生の娘がいるんですから。

同じ女子大生でも、自分の娘ってのは、あれは女じゃありませんからね。考えてみると、娘を育てるのは一番わりに合いませんな。機能的には女なんですが、どうにもなりやしない。ただこの誰とも知らない奴に、どうにかされちまうまでだまって家で養ってなきゃなんない。これこそ正に不条理だァーッといいたい位で馬鹿々々しいたらありやしない。

家の娘もいつか誰かに何とかされちまうんだから、私が里沙を何とかしたって、これで差し引きが零だから、勘定は合うんじゃないか、なんて考えたりして……。理屈は通ってるような気がしてくるなあ。

商店街で買いました、帽子を。つばの広い白い帽子。里沙がまたよく似合うんです。若き日のイングリッド・バーグマンとまではいきませんが、とにかくこの娘を連れて歩いてるだけで、私は大変幸せでした。

「何処かへ呑みに行こうか」

「六本木あたりはどう」

「いいねえ、パーっといきましょパーっ」と

ってなわけでこの六本木のカフェバーへやって来たってわけなんです。ええもうこうなったら行けるとこまで行くっきゃないですよ、いや本当に……。